
ハロウィン企画「銀の魔女」@妄想部

妄想部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハロウィン企画「銀の魔女」@妄想部

【Nコード】

N9763X

【作者名】

妄想部

【あらすじ】

ケーキ屋レイちゃんがハロウィンの日に魔女に仮装して頑張るお話です。

今回は匿名投稿なので、どの妄想部員が書いたものか予想するお楽しみ付き 解答編は明日11月1日18時に投稿予定です。詳しくは活動報告にあります。

ハロウィンの日

その日、家に帰った瞬間から面倒なことに巻き込まれるとわかっていた。

母親が、笑顔でレイを手招きしている。

この状況で、良いことなどあった試しがない。

「レイ、今日は何の日か知ってる？」

そう言われて壁にかかっているカレンダーを見た。

今日は10月31日。

レイの体内時計が正確なら、今日はハロウィンだ。

「知らない……」

反射的に知らないふりをしてしまう。

それも仕方がない。

正直に答えたところで、帰ってくる答えは同じだ。

「ハロウィンでした！　ということで、これ。店番よろしくね」

ほらみる。

ケーキ屋なんてやってるレイの家に、世の全てのイベントは儲け時でしかない。

両手に押し込まれた衣装を手に、レイは自分の部屋へと上がる。階段の途中で漏れてしまった溜息は、もう何度目だろう。

「母さん！」

「あら似合っじゃない。よかった」

一階の店に顔を出すと、平然と言つてのけた母親を恨めしげに睨む。

冷蔵庫から出て来た父親も、上から下まで見下ろすと悪くないなと呟いた。

「魔女つて……色々おかしいだろ」

母親に渡された衣装は、何故か魔女。

安物だと一目でわかるビニール素材のマントに、とんがり帽子。靴も、先が尖っている。

銀髪の長いカツラまで付いているのだからやるせない。男のレイに、この格好は色々と問題がある。

「だってあなた、女顔なんだもの」

そんな理由で、17歳の息子に魔女コスプレをさせる親がどこにいる。

「カボチャでもいいから、これは嫌だ！」

全部着てしまったレイが言つのも説得力がない。ただ、駄目もと言っておきたかっただけだ。

「駄目。カボチャは母さんがしたいの」

母親の希望なんて聞いていないと言いたかった。

正確には、言おうとした。
ただ、口を開いた瞬間、レイの視界は暗転した。

「魔女様だ！　魔女様が復活なさったぞ！！」

「成功だ。召還が成功した！」

石造りの平たい台の上に立っている。

チープな靴の裏からでもその冷たさがよくわかる。

その周りを囲うように老人達が涙を流しながらレイを拝んでいた。

「魔女様、名はなんと？」

レイは、それが自分のことだろうかと疑問に思った。
思ったところで自分の格好を思い出して頭を垂れる。

「……レイ」

レイが名を名乗っただけで、周りの老人達は声をあげて泣いた。
感動しきりの老人達を尻目に、レイの頭は冷えていく。

「聞いたか、みなの方！　なんと力強く圧倒的なお声だろうか」

そうだ、そうだ、と続く歓声に、レイは銀のかつらを取るタイミングがわからない。

「祝いだ。祝いをもってこい！！」

一番偉そうな老人が下っ端であろう若い者に言いつける。

「偉大な魔女、レイ様。どうぞお納め下さい」

声も手も震えている。

震えでかたかたと鳴る箱をレイがあげると、思わず顔を引きつらせた。

「ケーキ……」

直径21センチ、俗にいう七号サイズのホールケーキがそこにはあった。

本来なら8〜12名程度で食するそれを、一人で食えという。生クリームがソフトクリームのように盛られ、様々な果物がくつついている。

形も不揃い、色も決して綺麗ではない。

「バランス悪すぎ」

「え？」

レイは受け取りもせず、生クリームの塔の一番頂きを指ですくってなめた。

「……………」

「お、お味はいかがでしょうか。国一番のケーキ職人が腕をふるったのです」

レイの表情が一向に晴れないからか、聞いてもいないことをべら

べら喋る。

「そいつは誰だ」

鋭く睨むと、献上しにきた若者がびくりと跳ねる。

老人達がそっぽを向く中、若者は素直に洞窟の奥を見てしまった。そこには、黄ばんだコックコートを着た20代半ばの女が立っている。

「わ、わたくしでございます」

「ちよつと来い。食え」

レイが手招きすると、ケーキ職人は駆け足で寄ってきた。

レイが若者の腕からホールケーキを奪い、ケーキ職人の方へと差し出す。

「食え」

「はいっ！」

緊張でケーキ職人の声が裏返る。

レイと同じように生クリームを指ですくったケーキ職人はそのまま口に運んだ。

「これが何か」

「これをケーキと呼ぶなら、この国のケーキは滅べ。クリーム泡立
て過ぎ」

「は？」

「混ぜ過ぎって言えばわかる？ 口当たりが悪いだろ。この生クリームはケーキ向きじゃない。脂肪率30〜35%程度だろ」

「おっしゃる通りです」

呆然とレイを見るケーキ職人に、溜め息をひとつこぼす。

「軽いんだよ。45%くらいまで濃さを整えた方がいい」

「はい！」

「つつかりするな、ヘビークリームは固くなりやすい。混ぜすぎるのも駄目だ。こんな風に口当たりが悪くなる。生クリームは直前まで冷やしてるよな？」

「は……はい、たまには」

「たまにつてなんだよ、たまにつて。本当お前ケーキ屋やめろ。牛にすいませんって頭下げて来い」

レイはこの世界を救うために召還された魔女のはずだった。しかし、ケーキに対して怒っていることに老人達は目を向く。何故ケーキ。そして牛。

「俺に突っ込まれてるようじゃ、店持つなんて早いんだよ」

ふざけんな、そう言ってレイがとんがり帽子を脱ぎ捨てたと同時

にかつらが落ちる。

それを見た老人達は、一同に目が点になった。

「……………誰だ貴様!!」

「お前等が誰だよ!」

額に血管を浮かせて怒る老人達に、レイもすかさず言い返す。
それは至極もつともで、誰も何も言い返せなかった。

三ヶ月後。

「どうでしょう、レイさま！」

目を輝かせて、あの日出会ったケーキ職人がレイの前にケーキを差し出す。

ただ生クリームを積み上げて、飾り付けとけばいいんだろ、とばかりに果物を盛ったケーキを献上したのが三ヶ月前。

ケーキ職人の腕は、みるみるうちに上達した。

今差し出されたケーキには、高く盛られた生クリームはどこにもいない。

ホールの縁になだらかな曲線を描いて存在している。

ナパージュで艶を出した木いちごは、まるで宝石のようだ。

「不合格」

「ええ！？」

「中に果物詰め込み過ぎ。今はいいけど時間をおいたら形崩れるぞ。入れればいいってもんじゃない。適量って言葉を知らないわけじゃないよね？」

「すみません」

「あと、来月は恋人達の祝いがあるって聞いたけど、何するの？」

「え？ ……何もしませんけど」

ケーキ職人が目を丸くして平然と言ったのける。

日本で言うバレンタインにあたるこの日を逃して、いつ儲けるつもりなのか。

他店ではチョコやクッキーのプレゼント包装をしているというのに、このケーキ職人は、いかに盛るかにかけている。

レイが目を離すと、すぐに生クリームの塔を建てるのがいい証拠だ。

「一年間の計画表立てて。イベント月には最低でも二週間、期間限定メニューを取り入れること。稼ぎ時だろ？　みすみす手放すには惜しい」

「そ、そうですね！」

何にしようかなと言いながら空中を見て首をかしげる。

その頭を、レイが思い切り叩いた。

「お前の脳内で決めるな。紙に書けよ！　他の皆にいちいち説明して回るつもりか」

「なるほどー」

「なるほどじゃない！」

ふざけるな、という怒声が響くケーキ屋「銀の魔女」

レイは世界を救うことはなかったけれど、とあるケーキ屋の未来は救った。

三ヶ月後。（後書き）

余分なものをそぎ落とすって難しすぎる……。
ということ、小野チカでした！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9763x/>

ハロウィン企画「銀の魔女」@妄想部

2011年11月1日19時03分発行